

早稲田大学大学院文学研究科

概 要 書

論 文 題 目

エジプト中王国時代における葬送儀礼の実践と展開
—棺の装飾と考古資料からみた器物奉獻儀礼—

申 請 者

山崎 世理愛

文学研究科人文科学選考考古学コース

【序章】

本論は、エジプト中王国時代（ca. 2009-1630 BC）の葬送儀礼の中でも供物奉献儀礼の実態解明を目標とした。これまで供物奉献儀礼の研究と言えば食糧供物が中心で、文字・図像資料および土器を中心とする考古資料を用いて、思想的背景や儀礼行為が明らかにされてきた。しかし、供物奉献儀礼には食糧以外のモノの供物も含まれる。食糧奉献儀礼とは異なり、この器物奉献儀礼に関しては、積極的に研究が進められてきたとは言えない状況にある。オブジェクト・フリーズと呼ばれる棺の装飾には、図像と文字ラベルによって器物奉献儀礼に属するものが描写されており、死者に捧げるべき器物の内容を知ることができる。当該儀礼の典礼（＝特定の儀礼を規定するような枠組みを持つ図像・文字資料）として位置付けられるのである。しかしながら、オブジェクト・フリーズに描かれた器物の構成は大枠でしか捉えられてこなかった。また、儀礼の実践に関しても、埋葬時に一度だけ執行される儀礼として位置付けられるのみで、具体的な実践方法は不明であった。器物奉献儀礼研究は、宗教的背景への言及や儀礼の枠組みを越えた分析が進展しないまま現在に至ってきたのである。

以上から本論は、中王国時代における食糧以外の器物奉献儀礼の実践や思想を明らかにすることを目的とした。供物奉献儀礼を構成するもう一方の食糧奉献儀礼行為は、供物リストの影響を受けながら一定の規則性のもと墓内および地上に土器が奉献されていたことが明らかにされており、器物奉献儀礼についても実践に際してそういった規則性が存在した可能性が考えられる。また、器物供物は食糧供物とは違い、地上には供えられず埋葬時に一度だけ墓内に捧げられたということで、その副葬配列に込められた意味合いはより一層強いものであったと推測される。さらに、棺に描かれたオブジェクト・フリーズは、単なる器物の羅列ではなく、それ自体が葬送儀礼を表現していることから、典礼であるのと同時に棺上ですでに儀礼が実践されていたと捉えられる。したがって本論は、棺上・実際の墓内における器物奉献儀礼は、当時の思想を反映しながら戦略的に行われたのではないか、という問いのもと分析・考察を進めた。具体的には、まずオブジェクト・フリーズに表された器物奉献儀礼に属するものの描写傾向を分析することで、当該儀礼の典礼と棺上での実践方法を復元した。そして、それを実物の出土傾向や副葬コンテクストと比較し、器物奉献儀礼の墓内における実践方法と思想的背景について論じた。また、中王国時代前期の棺に描かれたオブジェクト・フリーズは時期によって内容に変化があること、そして実物が副葬された墓の多くが中王国時代後期に年代付けられることから、中王国時代を通じた器物奉献儀礼の展開についても考えた。

【第 I 部】

上記の目的を達成するために、まず第 I 部では中王国時代の歴史的背景と埋葬習慣・来世思想について概観し、対象とする時代の社会的・宗教的コンテクストを整理した。特に来世思想については、コフィン・テキスト研究によって明らかにされている死者の再生復活に関わる儀礼の循環について、オシリス神との同一視や通夜といった概念とともに提示した。つまり、中王国時代には死後にオシリス神となることで、神話が表すように再生復活を果たすことが出来ると考えられてきたが、コフィン・テキストを精査した研究によると、被葬者はオシリス神（＝行為の受け手）とホルス神（＝行為者）としてのアイデンティティを交互に持つことで死後に通夜と再生復活を繰り返したということが分かるのである。通夜は器物奉献儀礼と密接に関わるため、本論の考察においても軸となる来世思想である。

【第Ⅱ部】

第Ⅱ部では、オブジェクト・フリーズを対象に分析と考察を行った。第1章においては、オブジェクト・フリーズに対して行われてきた①全体的なレイアウトの分析（巨視的アプローチ）と②描かれた各器物の個別分析（微視的アプローチ）という2つの先行研究方法についてまとめ、本論で実施する両者を折衷した新たな研究の必要性を挙げた。すなわち、本研究ではオブジェクト・フリーズに描かれた各対象器物に着目はするものの、分析の視点としては意味の追究ではなく、器物の配置や組み合わせといった描写コンテキストを重視するということである。この分析により、第Ⅱ部ではオブジェクト・フリーズに表された器物奉獻儀礼の典札と棺上における実践方法の解明を目指した。

第2章では、本論で集成した83点の棺資料について出土遺跡ごとに概観し、次章からの分析に向けた取り扱い方法についても述べた。本研究では、オブジェクト・フリーズに描かれた各対象器物に着目し、その描写傾向を抽出するが、そのためには箱型木棺内側の各側面に描かれた対象器物の種類を同定し、文字ラベルがある場合にはそれも判読する必要がある。基礎的な作業であるが、未刊行資料を多数用いている本論においては必要不可欠である。この基礎作業の結果、1,973点の描写された器物が資料化された。

続く第3・4章では、対象器物の描写コンテキストを重視した分析と考察を行った。まず、器物奉獻儀礼は供物内容や起源によって、古王国時代のピラミッド・テキストに起源する「王族の器物奉獻儀礼」と「王権の象徴奉獻儀礼」、そして王族の儀礼的背景を持たない「個人的な器物奉獻儀礼」に細別されるため、それぞれに属する器物の描写傾向を追った。オブジェクト・フリーズは主に中王国時代前期の箱型木棺内面に描かれたが、早期の**タイプ1**は胸側面にオブジェクト・フリーズは表されず、アメンエムハト2世治世頃から胸側面にも描かれる**タイプ2**があらわれる。したがって分析に際しては、器物組成に見られる全体的な傾向に加え、棺タイプ差も含めて検討を行った。その結果、棺のタイプによる各器物の描写頻度やコンテキストの差異を抽出することができた。また、同じ器物であってもさらにその中で細分可能なことがあり、それらの組み合わせにも異なる傾向が見られた。

まず、タイプ1の棺における描写傾向としては、「個人的な器物奉獻儀礼」に属する装身具が主要な品目として示され、時には「王族の器物奉獻儀礼」の器物も加わることが分かった。その「王族の器物奉獻儀礼」に関しては杖類の描写が中心的で、緩やかなセット関係においても、明らかに古王国時代のピラミッド・テキストを意識し棺に描かれていたことが判明した。一方、タイプ2における各器物奉獻儀礼と関連する器物の描写としては、主に「王族の器物奉獻儀礼」と「個人的な器物奉獻儀礼」に属する器物が主要な品目として示され、デイル・エル＝ベルシャ遺跡では「王権の象徴奉獻儀礼」の器物もセットとして加わる傾向が看取された。「王族の器物奉獻儀礼」に関しては、武器類と杖類がしばしば完全に近いセットで描写され、同じ種類の器物であってもその中でさらなる多様性や対となるセット関係が重視されていた。そして、タイプ2の木棺では、背側面だけでなく胸側面にもオブジェクト・フリーズが描かれたことから、描写側面の傾向をもとに棺上での器物奉獻儀礼の「実践」について一層具体的に考えることができる。その1つとして、多重棺における同種類の器物あるいはセット関係にある器物の棺間を跨いだ正対描写が挙げられる。このことから、多重棺は葬送においてセットとして機能し、儀礼的背景を持つ器物で被葬者を重層的に囲むという意図があった可能性を指摘した。また、中には特定の描写側面と結び付く器物が確認された。特に、「王族の器物奉獻儀

礼」に含まれる杖類の中で、ペジュアハと呼ばれる屈曲した杖だけが背側に描かれるという点が顕著な傾向として認められてきた。「王族の器物奉獻儀礼」の宗教的背景として通夜が挙げられ、壁画などに描かれた通夜の場面において、オシリス神と同一視されベッドでうつ伏せになっている被葬者が表されているが、そのベッドの下には「王族の器物奉獻儀礼」に属する器物が配置されている。しかしそこにはペジュアハは示されておらず、その代わりうつ伏せになった被葬者の背中上方にペジュアハが描かれている。こういった配置関係は、上記のオブジェクト・フリーズにおける表現と一致する。つまり、タイプ 2 の棺上では、主に胸側に描かれた王族の儀礼的背景を持つ他の器物とは反対側の被葬者の背中側に当たる側面にペジュアハを描くことで、通夜の場面を再現・実践していたと考えられるのである。

【第 III 部】

中王国時代前期に見られたオブジェクト・フリーズは次第に描かれなくなり、中王国時代後期を中心としてそれら器物の実物のみが副葬されるようになる。また、一部では中王国時代前期にも実物が副葬されている例が見られる。理想的な器物奉獻儀礼の在り方が表されたオブジェクト・フリーズの分析だけでは、器物奉獻儀礼の実態を解明するという本論の目的を達成することは出来ない。典礼と現実の共通点や相違点を抽出し、その背景にはいかなる理由や意図があったのかという点を考えてこそ当該儀礼の実情に迫ることが出来るのである。そこで、第 III 部では実際に墓から出土した副葬品を対象に、現実における器物奉獻儀礼について考えた。

まず第 1 章では、「王族の器物奉獻儀礼」に属する器物が実際に副葬された墓について、その分布状況や時期差、墓構造といった全体的な傾向に加え、副葬品組成や副葬配置といった個別のコンテキストを重視した分析を行った。これは、先行研究において「宮廷タイプ」の埋葬と呼ばれてきた埋葬を再考することにも繋がる。そして分析の結果、いわゆる「宮廷タイプ」の埋葬はそれまで指摘されていたよりも多様性に富んでいることが分かった。また、中王国時代前期には棺上で比較的幅広く再現・実践されていた「王族の器物奉獻儀礼」は、中王国時代後期には王族を中心とするごく一部の埋葬で実物を用いて実践されていた。それは関連器物を所有しているだけでなく、副葬配置によって具体化されていた。通夜を再現・実践したタイプ 2 におけるオブジェクト・フリーズが示す器物の配置と一致する実際の例が見られ、中王国時代前期に棺上で「実践」されたものが中王国時代後期を中心として実物を用いても同様に実践されていたことが判明したのである。そして、被葬者を重層的に囲むというやはりタイプ 2 の棺上で確認された器物奉獻方法は、現実では棺内・棺外への相互補完的な副葬配置という姿に変わりながらも保持されていた。また、棺内・棺外という異なる空間への副葬配置は、儀礼の反復性を意図した行為であったと考えられる。対して、王族や典型的な「宮廷タイプ」以外の埋葬ではオブジェクト・フリーズとの共通点は少なく、穀竿（ビーズ）だけが副葬されていたり、オシリス神との同一視とは異なる背景を持つ副葬品が相伴していたりと、現実に合わせて創意工夫のもと「王族の器物奉獻儀礼」が行われていたことが分かった。

第 2 章では、「個人的な器物奉獻儀礼」と「王権の象徴奉獻儀礼」について、装身具類を対象に分析を進めた。その結果、まず「王権の象徴奉獻儀礼」の器物が実際に副葬されることは稀で、王族墓か一部の南部地域の埋葬で確認された。対して、「個人的な器物奉獻儀礼」の装身具は比較的頻繁に取り入れられていたが、オブジェクト・フリーズにおける描写傾向とは逆の出土傾向が看取された。

というのも、襟飾りなどオブジェクト・フリーズに必須品目として描かれた装身具の主要セットは実際にはほとんど出土せず、描写頻度の低かった一連ビーズ製装身具が最も一般的なものとして位置付けられたのである。ある程度の自由が存在した中王国時代社会であるが、儀礼に用いられるような特定の器物に関してはそうではなかった可能性が挙げられる。そのような中、王族など例外的な埋葬では襟飾りを含む主要セットが副葬され、その組成はオブジェクト・フリーズと類似していた。またそれらは反復的に配置されており、儀礼の繰り返しが重要視されている様子が窺えた。しかし、儀礼執行のタイミングは、ミイラとともに墓へ運ぶことが示されている典礼とは異なることが分かった。理想に近い器物が捧げられても、やはり現実に合わせて創意工夫の上で葬送儀礼が行われていたということである。

【終章】

オブジェクト・フリーズおよび実際の考古資料の分析結果を踏まえ、中王国時代における器物奉獻儀礼の実践方法について考えると、棺（タイプ 2）と実際の墓内における器物供物の配列では、共通して「反復性・重層性」と「相互補完性」に重点をおいていたことが明らかとなった。まず、棺上では正対描写が単一棺だけでなく多重棺にも見られ、内棺・外棺の同側面に同類のものが描写されることもあり、襟飾りに関しては棺間で種類・素材を多様化させている例もあった。オブジェクト・フリーズが棺に描かれた中王国時代前期には、しばしば被葬者はミイラマスクを被った状態で棺に納められるが、通常ミイラマスクにも装身具が描かれており、ここでもオブジェクト・フリーズと反復し器物が重層的に描かれていた（＝配置されていた）と言える。さらに、オブジェクト・フリーズではセット関係にあるものを正対描写している例も見られ、その場合にそれらは相互補完的な関係にあると言える。このように、タイプ 2 の棺上では多種多様なものを繰り返し被葬者の周りに捧げることが意図されていた。そして、その結果として器物奉獻儀礼に属するもので重層的に被葬者を囲う空間が形成されていたのである。現実においても実物を用いて墓内で器物奉獻儀礼が実践されたが、それに伴う器物供物の副葬配置には上記と同様の意図が認められた。しかしそれは棺内・棺外、ミイラ包み内といったコンテキストでの行為化であった。つまり、「王族の器物奉獻儀礼」に属する器物は棺内と棺外に副葬されており、これは反復して異なる段階・空間に配置されたことを意味する。また、棺内と棺外で同類の器物が見られるのに加え、セット関係にあるものが配置されることもあり、棺内・棺外の「王族の器物奉獻儀礼」に属する器物は、儀礼の反復を表しているのと同時に相互補完的な関係性にもあったと言える。「個人的な器物奉獻儀礼」の装身具類に関しては、ミイラ包み内で反復的に配置されていたほか、人型棺あるいはミイラマスクに描かれた装身具とも重複していた。以上のように、実物を用いた器物奉獻儀礼に関しては、供物の構成は棺上に表された理想的な内容に及ばないものの、儀礼行為自体には棺上と共通する認識・意図があったことが分かる。

供物奉獻儀礼の中で、食糧奉獻儀礼は埋葬後も定期的に行われる一方、器物奉獻儀礼は埋葬時に一度だけ行えば良い行為として位置付けられた。しかし、本論では器物奉獻儀礼も繰り返されるべき行為として認識されていたことを明らかにした。棺における器物の描写と墓内における器物の配置という方法は違っても、根底にある儀礼の反復性という意図は共通していたのである。そして、中でも「王族の器物奉獻儀礼」の反復とは、通夜が繰り返されていることを意味する。棺装飾や実物の配置によってそれが“実現”されていたのである。

本論では、オブジェクト・フリーズと現実における副葬行為の相違点も抽出した。まず、「個人的な器物奉獻儀礼」や「王権の象徴奉獻儀礼」に属する装身具の奉獻段階については、理想とされるタイミングとは異なっていた。なぜなら、実際にはミイラ包み内に装身具は配置されていることが多く、典礼が表すようにミイラ化後に奉獻されたとは考えられないからである。その背景として本論では、実際に儀礼を執行する上でより現実に見合うように工夫した結果であったと考えた。死者をミイラ化し棺に納めてからではオブジェクト・フリーズに示された適切な位置に装身具を配列することは出来ないため、現実的に可能な段階を踏んだということである。さらに、王族を中心とする埋葬以外では、一層相違点が目立つことが明らかとなった。それらの埋葬に取り入れられた器物奉獻儀礼に属する副葬品は、組成・素材といった点で高位の人物のものと比べると大きく劣り、オブジェクト・フリーズとの類似性も低かったのである。そして、そういった埋葬では、安価な素材での代用や模型での代用、世俗的な背景を持つ器物との組み合わせといった王族墓ではほとんど見られない独特な方法で対応していたことが判明した。その背景としては、被葬者あるいはその親族の社会的地位や経済状況に合わせた創意工夫が挙げられる。実際には典礼通りに儀礼を実施することが全てではなく、可能な範囲で様々な工夫をしながら、被葬者の来世での再生復活のためにより良い儀礼を実践し、それを永続させる埋葬空間を形成することが真に追求されたのだと考えられる。

最後に、中王国時代における器物奉獻儀礼の展開に着目すると、中王国時代前期には比較的広範囲で非王族の棺にオブジェクト・フリーズとして描かれたほか、一部の埋葬では実物も所有されていたのが、中王国時代後期になるとメンフィス・ファイユーム地域が中心となり、そして社会的地位によって格差が生じるようになるという流れが復元された。その背景としては、中王国時代後期に強化された中央集権という政治的側面との関係性が指摘できる。つまり、中王国時代後期には中央集権化に伴って有力者による地方統治体制は解体され、その代わりに王宮に従属する官僚が国家行政を担っていくという支配体制が発展した。その結果、中央の官僚が増加あるいは組織体制に変化が生じ、改めて社会的地位の格差を表示する必要性が出てきたと考えられるのである。地方有力者の消滅は、棺にコフィン・テキストが書かれなくなる時期とも重なることが分かっている点からも、政治的転換期に際して、葬送文化もいわば次なるステージへと移行させられたと捉えられる。それは、コフィン・テキストやオブジェクト・フリーズとしての棺上描写から実物を用いた実践というかたちへの変化であった。そしてその際、上位層は他と差別化するために、副葬品の組成や素材に違いを与えたと考えられるのである。以上のように、中王国時代における器物奉獻儀礼の展開は、当時の社会状況とも連動していたことが分かった。そしてそこには、中央集権化に伴い葬送文化にも影響が及び、特定の副葬品の利用に対して格差を与えることで、ある程度の自由を認めながらも中央集権を確立・維持しようとする戦略が窺えるのである。

続く新王国時代には、それまでの伝統的な葬送観念・来世思想に加え、「死者の書」といった新たな典礼が出現する。このように、葬送儀礼と関わる内容を含む様々な葬祭テキストが展開していく中で、実際の葬送儀礼行為にもそれが複雑に影響したと考えられる。すでに中王国時代のコフィン・テキストには「死者の書」の概念的枠組みが表れている例があるとされるが、新王国時代にはそれまでの伝統と新たな典礼の共存や変容という側面が一層顕著になり、葬送儀礼行為自体も新たな局面を迎えるのである。